

# 還暦からの新たな挑戦

株式会社ジーアンドエス 代表取締役社長

萩原扶未子



Hagihara Fumiko

出身・石川県金沢市  
活動内容・「男×女活用®経営革新」  
コンサルティング  
趣味・お酒、猫の世話  
座右の銘・一日一生

## 25歳で受けた大手術

25歳で後腹膜腫瘍こうわくもくしゅようという病を患い、大手術を受けた体験が私の人生観を一変させました。

二部上場のコンピューター関連企業でプログラマーとして働いていた私は、深夜までの残業後に飲みに繰り出したり、週末はテニス、冬はスキーに勤しんだり

と、バブリーな世相そのままに「明るく元気に楽しく」をモットーとする日々を送っていました。

体調不良で民間病院を受診した際、ついでにエコー検査を受けたところ、さまざまな臓器が集まっている後腹膜腔に拳より大きい腫瘍が見つかりました。即入院し、手術を受けるため金沢大学医学部附属病院(現金沢大学附属病院)に転院しました。腫瘍は肝臓や胃、脾臓、大静脈に食い込んでいて、しかも、良性か悪性かは開腹してみないと判断できないと主治医から告げられました。

手術までの約1カ月間は、術前検査のために外科病棟の大部屋に入っていましたが、明日をも知れないような重症・重傷患者が入れ代わり立ち代わり搬送されてきました。中には手術室から還ってこない患者さんもいて、不安は募るばかりです。

手術前に個室に移された私は、主治医とこんな会話を交わしました。  
「輪切りに近い開腹になる。もし周辺の臓器に癒着していたら、全部取らないといけない」



還暦からの新たな挑戦

「そんな体になつて、生きている人はいるのでしょうか？」

「うーん……でも、良性ならポコッと取れるかも」

その夜は居ても立つてもいられず、気を紛らわそうとこっそり車で抜け出して、深夜営業中の本屋さんに駆け込みました。つくねんと店内に佇んでいると、魂が体から抜け出して、現実世界を俯瞰<sup>ふかん</sup>しているような不思議な感覚に陥つたことを覚えてています。

### 「悔いのない人生」を目指し起業

手術を終えて目が覚めたのは翌日でした。幸い腫瘍は良性で、周辺の臓器も無事でした。それでも38センチも開腹したので、ちゃんと歩けるようになるまで、さらに1カ月ほど入院生活が続きました。計約3カ月にも及んだ入院生活で、私はこう考えるに至りました。

「人生いつ何があるか分からぬ。毎日をなんとなく過ごすのではなく、目的を持つて精励し、いつ終わっても悔いのない人生を送ろう。それが生きた証しになる」

退院すると、私はすぐアクションを起こしました。会社を辞め、結婚し、そして無鉄砲にもいきなり株式会社ジーアンドエスを設立したのです。業種はキヤリアを活かせる情報処理サービス。自宅兼用の8畳の和室に机とパソコン、複写機、電話が各1台あるだけのスタートでした。

コンピューターのことは詳しくても、経営に関しては営業のイロハすら知らないズブの素人ですから、草創期の苦労話、赤面話、笑い話だけで本が書けそうなほどの悪戦苦闘を強いられました（実際、7年後に明日香出版社から『あなたも20代で自分の会社を持ちなさい！』を出版しました）。

それでも、金沢経済同友会、金沢青年会議所をはじめ10を超える経済関連団体や異業種交流会に入会して人脈を広げたり、手当たり次第に経営セミナーやビジネス本で勉強したりしながら、必死に試行錯誤を続けた結果、折からのバブル景気の追い風もあって業績は右肩上がりで伸び、4年目には金沢市内に敷地約180平方メートル、鉄筋3階建ての自社ビルを所有するまでに成長することが

できました。

その後も糾余曲折はありながら、社業は順調に拡大し、ピーク時には社員が30人近くに達しました。

### 経営コンサルタントに転身

しかし、創立15年目の平成12年、40歳になつた私は、仕事への向き合い方をリセットする決断をしました。自己実現のための起業だったはずが、いつしかお金と社員のための経営に変わってしまったこと、あまりにもめまぐるしく変化するICT業界に限界を感じたことなどいくつかの理由がありますが、直接的な引き金になつたのは、仕事に追われてまともな看病もできないまま、父、そして子供代わりに溺愛していた2匹の愛犬を立て続けに失つたことです。最後に亡くなつた愛犬は看取ることもかないませんでした。深夜に帰宅して、まだ温もりの残る亡骸に触れた時、私の中で何かがツツンと切れました。

「プライベートをないがしろにして、後悔しない人生など実現できるはずがない」と

い。自分がやりたいことを、他人に左右されず、自分の才覚と努力で、マイペースでやつていこう

そう結論づけた私は、組織業務を分社譲渡し、経営者としての実体験をベースにした経営コンサルタントに転身することにしたのです。右も左も分からぬ若輩の女性がベンチャー企業を立ち上げ、散々苦労しながら軌道に乗せた経験とスキルは、ビジネス社会で必ず役立つはずとの確信がありました。だけど経験則に頼るだけでは底が浅く、説得力や普遍性に欠けます。

そこで、学術的な理論武装を図るべく、名古屋市の南山大学大学院に入つて経営学の研究を始めました。少しづつ入ってきた仕事をさばきながら、週1回、朝一番の高速バスで名古屋に向かい、最終の新幹線と「しらさぎ」を乗り継いで午前様で帰着する生活を4年間続け、修士を取得しました。実はその後も、多忙になつた業務をこなしつつ、北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究所、さらには金沢大学大学院自然科学研究科の博士課程に入り、研究のブラッシュアップに努めました(単位取得満期退学)。



「女性センターフェスティバル2009」で谷本正憲石川県知事から表彰を受ける  
=平成21年10月、金沢市の石川県女性センター

共に働きやすい組織づくりが求められる」と考へたのです。男と女は体格も、体の構造も、ホルモンも、装いも、価値観も、発想も、家庭での役割も違います。男女均等は権利の話であって、性差を踏まえない限り女性管理職は育たないし、女性が活躍することもできません。

男女共同参画社会基本法、男女雇用機会均等法、女性活躍推進法などが制定され、ようやく時代は変わりつつあります。女性が働く環境はかなり改善されました。でも、その恩恵に浴しているのは高学歴の大企業

### 男女の特性活かした組織づくり

コンサルティングや研修の中心テーマは、女性管理職育成や男女の特性を生かした経営です。起業当時は女性経営者自体が珍しかった時代でした。早く一人にならうとセミナーや本を通じてがむしゃらに学んだわけですが、教えに準じて振る舞うと、男性からは「女のくせに生意気」と見下され、女性からは「上から目線」と敬遠されました。私が受けたセミナーも読み漁った経営指南書も、すべて男性目線の内容だったからです。

多少大げさに言えば、当時のビジネス界は男性の価値観と行動規範に支配された「男社会」であり、女性はアシスタントもしくは「職場の花」にすぎませんでした。管理職候補とは見なされておらず、社歴を重ねても待っているのは「お局さま」のポジション。管理職を目指すには「スカートをはいたオヤジ」になるほかないませんでした。

そんな時代を生き抜いてきたからこそ、男女の特性を理解して活用し、男女

入社組に限られていて、中小・零細企業ではそれほど変わっていないのが実態です。だから私は従業員300人以下の中小・零細企業にフォーカスしました。大多数を占める中小・零細企業の経営革新が進まなければ、女性が本当に活躍する社会は実現しないと本気で思っています。

### ボランティアで女性の起業支援

おかげさまで私のコンセプトは広く受け入れられ、民間企業はもとより、行政や独立法人、経済団体などから、しかも地元のみならず全国からもコンサルティングや研修、講演などの依頼が増えていきました。

そんな中で、個人的な思い入れもあって、早くから力を注いだのが女性の起業支援です。それこそ私自身が身をもつて体験した原点とも言うべきテーマであり、私なりに恩返ししたいとボランティアで取り組み始めました。

セミナーーやコンサルティングを通して、起業・経営の基本だけでなく、女性がビジネスを営む際に必ずぶつかるワークライフバランスの壁や男社会の壁などを

どう乗り越えるかを、助言・サポートする活動はとてもやりがいがありました。平成18年には女性起業家を支援する「女性起業家交流会 in HOKURIKU」も立ち上げました。

こうした取り組みが評価され、平成25年にはいしかわ女性基金の「いしかわ女性のチャレンジ賞」を受賞しました。また、平成29年には経済産業省の「女性起業家支援コンテスト」の伴走賞、広域賞を、翌30年も同奨励賞を受賞しました。ジェンダーや女性の活躍がクローズアップされる世相もあってマスメディアで取り上げられる機会も多く、「女性起業支援の先駆者」のレッテルまで張られるようになりました。もちろん名誉なことではありますが、「私の主戦場はそこじゃない！」とちょっとびりすねたい気分もないわけではありません。

### コロナ禍追い風にビジネススタイルを転換

そして今、私は第三の転機を迎えています。還暦を機にビジネススタイルの大転換を図ったのです。実は50代半ばを過ぎたころから、慌ただしく東奔西走す

ラインに対する顧客層の抵抗感がなくなりました。いちいち現地に赴いていた事前打ち合わせもオンラインで十分です。研修プログラムをパッケージングすることで、打ち合わせ 자체も簡潔に済ませられます。新スタイル構築のための経費はコロナ対策関連の補助金を活用できました。

キヤツチフレーズは「男×女活用®経営革新」。長年培ってきたメソッドとノウハウを集大成して、男女の特性が活かされる「カフェラテ型組織」を提案し、実践につなげる内容です。

このリストアートに合わせて、久しぶりにホームページを刷新し、名刺とパンフレットも作り直しました。研修コンテンツの映像配信にも着手する予定です。コロナ禍を奇貨とした還暦からの新たな挑戦は始まつたばかりです。



リニューアルしたジーアンドエスのホームページ

る方式を続けていては身が持たなくなると感じ始めました。加えて、近所で独り暮らしをしている80代の母のサポートを最優先にしたいとの思いが募ってきました。十分な看病をできないまま父を見送った後悔を繰り返したくないのです。

そこで3、4年前から、ＩＣＴやデジタル技術を活用し、金沢に居ながらにしてコンサルティングや研修業務ができるよう準備を始め、令和2年、研修プログラムのパッケージ化とオンライン化を実現することができました。いわゆるデジタルトランسفォーメーション(DX)のチバ版と言つてもよいかかもしれません。

偶然ですが、追い風になつたのはコロナ禍です。リモートワークが推奨され、オンライン